

令和3年5月7日(金)～13日(木)
信楽―土の賦 十二人展Ⅱ



「信樂 一土の賦 十二人展 II」に寄せて

古稀を迎えて、改めて初心ということを考えるようになった。世阿弥は、能楽の芸術論ともいうべき『花鏡』の中で「是非の初心忘るべからず。時々^ふの初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず」と書いている。「是非の初心」とは未熟だった頃の初心で、「時々^ふの初心」とは年齢ごとの段階的な初心である。七十になって少しは文章を書けるようになったが、若い時のように徹夜をしてまで書くことはなくなった。肉体は否応なく老いてゆくのだ。

しかし、この年になっても、まだ仕事があるということは有り難いことで、いまは「老後の初心」を愉しんでいる。能は花がなければ面白くない。人生も同じで、だから「心の花」が大切なのであろう。能は肉眼ではなく、心眼で見るものだという。これは、どの芸術にも通じることではないかと思う。花のない人生は退屈であり、作品もまた然りである。

青木寿美子は、織部と黄瀬戸が大好きだという。名古屋から信樂に移住しても、その想いは変わらない。青木の絵付けは、今まで見てきた景色、モノ、コト、感情などが入り混じって、抽象的に即興で描いたものだ。この《させとの壺》はその抽象的な絵付けを織部風に描いたもので、赤貝の緋色がいいアクセントになって、青木独自のスタイルを確立している。

大西左朗の《信樂捏ネズ茶盃》は、銘のごとく彼の「新たなる」挑戦である。用に合わせた土作りではなく、様々な特徴を持った原土をそのまま組み合わせることで、土本来の特徴を生かしている。そのため白土、粗い土、細かい土、密なるもの、鉄分などが筋状に入り交じり単味にはない表情が生まれる。茶碗の内側には、水漏れを防ぐため釉薬が施されている。

奥田陶生の《信樂茶碗》は、恐らく奥田が憧れる山茶碗が根底にあるのではないかと思う。試行錯誤の末に自分の生き様、精神の発露として、この茶碗に辿り着いたのであろう。奥田は、初心に帰って自分にしか出来ない、古の武士のような風格のある茶碗を作りたいという。「一剣を持して起つ」とは、そういう意味の籠った言葉であるようだ。

神崎秀策は、伝統を受け継ぎつつも古いものを目指すのではなく時代に即した作品、作家として未来に残る作品を作りたいという。その想いから生まれたのが、火色の美しい《信樂水指》である。世阿弥は「時分の花」に安住することを戒めている。「真の花」こそ大切であるからだ。その「真の花」を求めての神崎の挑戦は、すでに始まっているようだ。

小牧鉄平は、これまで信樂古窯を再現した半地下式穴窯で独自の造形表現を追求してきたが、自己表現する時には幾何学文様を用いるという。いま住んでいる信樂町多羅尾は、信樂の中でも一番標高が高く、そこから毎日外を眺めていると、ふっと「古代想起」を想うことがあるという。《炭化幾何文注器》は、そんな想いから生まれた夢のある作品である。

迫能弘は、信樂の薪窯とは別に、年に一度は穴窯での炭化焼成にも取り組んでいるという。その理由は、信樂の地に来る前に、能登半島の珠洲焼に出合ったからだ。今回の《炭化しのぎ茶碗》は、大胆なしのぎに変化を付けて、独特な茶碗に仕立てている。しっかりとした造形と上品な炭化の黒が、この茶碗の魅力である。

篠原希は、口造りは違うが、前回は《窯変壺》を出品した。この作家の作品は、焼締めを基軸に、土と灰が噛みつき合うように溶けた景色が印象的である。篠原は、信樂の白く長石を含む土の面白さと、その土の可能性を追求して止まない。この《窯変壺》は、表面の変化に富んだ表情に比べると、裏面は火色の走る地肌に幾筋もの釉流れが美しい。

高橋楽斎の《七宝透鉢》は、火の神様からの贈り物ではないかと思う。計算して窯詰めしていても、こんな上品な火色の作品はなかなか取れない。運だけでなく、長い経験と勘がモノをいうのであろう。この《七宝透鉢》は、籠花入をイメージしたもので、小さな花瓶が付いている。パテランにして、初々しい作品である。

高間智子の積層彩磁は、何種類もの色の磁土を何層にも重ね、模様を削り出すという独特な技法を駆使した作品である。これまでの作品は、比較的彫りのはっきりしたものであったが、この《積層彩磁一花器一》は境界線が曖昧で、積み重なる記憶や感情が薄れていくことで、逆に想いが地層のように自分の中にかたちを残しているという。

谷穹の《信樂 蹲》は、これまでの信樂の概念を打ち破る白い壺である。やきものの歴史は、大雑把に捉えれば、白いやきものを求めての展開であったのかも知れない。そう考えると、白い信樂があっても不思議ではない。やらないで後悔するよりも、やって反省することが大切だが、谷の大胆な挑戦を、仲間と温かく見守りたいと思う。

津守愛香の《ピアニカ飛天》は、雲上で奏楽する飛天をモチーフにした作品だが、四月から小学校に通う愛娘がモデルになっている。津守にとって愛娘はまさに天使のような存在なのであろう。作品からは、母である津守の初々しい慈愛が感じられる。これは、いまの津守にしか作れない作品である。物を作るとは、そういういまの積み重ねなのであろう。

古谷和也の作品には、不思議な魅力がある。才能の99%は努力だという。その努力があって、1%の才能が輝くのである。この《信樂混成花入》は、手捻りで成形した後、器の表面に原土を貼付けて整え焼成したもので、豪快な口造りが見どころである。ダイレクトメールの表紙は花入を真上から覗いたものである。内側に掛けられた淡い緑釉が美しい。

森 孝一（美術評論家・日本陶磁協会 常任理事）

信樂 一土の賦 十二人展 II

会 期 令和3年5月7日(金)～13日(木)

会期中無休

開 廊 時 間 11:00 ～ 19:00

※ 最終日の5月13日(木)は17:00まで

出 品 作 家 青木寿美子 5月8日(土)～9日(日)
[在廊予定日] 大西左朗 5月11日(火)～13日(木)
奥田陶生 5月7日(金)～11日(火)
神崎秀策 5月10日(月)～11日(火)
小牧鉄平 5月12日(水)～13日(木)
迫 能弘 5月10日(月)～11日(火)
篠原 希 5月7日(金)～8日(土)
高橋楽斎 5月11日(火)～13日(木)
高間智子 5月8日(土)～9日(日)
谷 穹 5月7日(金)
津守愛香 5月8日(土)～9日(日)
古谷和也 5月8日(土)～9日(日)

(五十音順)

※ 恐れながら、コロナ禍の影響で、変更になる可能性があります。

会 場 柿傳ギャラリー

KAKIDEN GALLERY

〒160-0022 東京都新宿区新宿 3-37-11 安与ビル地下2階
(JR新宿駅 中央東改札より徒歩1分)

TEL 03-3352-5118 / FAX 03-5269-0335

MAIL gallery@kakiden.com

http://www.kakiden.com/gallery



柿傳ギャラリーHP



公式 Instagram



新型コロナウイルス感染予防対策

ご来廊される皆様に、弊廊でのひとときをより安心してお楽しみいただけますよう、下記の新型コロナウイルス感染予防対策を実施しております。恐れ入りますが、お客様のご理解とご協力を頂けますよう、よろしくお願い申し上げます。

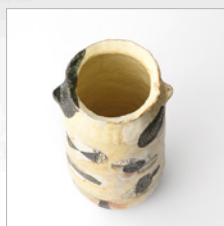
1 大切なお客様へのお願い

- ・弊廊入口とビル入口に、アルコール消毒液を設置しております。ご来廊の際は、恐縮ですが、手指の消毒をお願い申し上げます。
- ・お出かけの際は、マスクのご着用をお願い申し上げます。
- ・現在、発熱がある場合や体調がすぐれない方は、申し訳ありませんが、ご来廊を見合わせて頂きますよう、お願い申し上げます。
- ・過去2週間以内に、発熱や風邪で受診や服薬等をした方、および海外への訪問歴のある方は、ご来廊をお見合わせ頂きますよう、お願い申し上げます。
- ・店内の混雑緩和のため、出来る限り、少人数でのご来店をお願い申し上げます。
- ・コロナ禍までは、お客様にお出ししていた玉露などの呈茶のサービスを、申し訳ありませんが、当面の間、控えさせていただきます。

2 弊廊として取り組んでいる事

- ・弊廊内に高機能換気システム「ロスナイ」(三菱電機製)を令和3年1月6日に導入致しました。この新しく強力な換気設備により、15～20分に一回は、弊廊内の全ての空気が入れ替わる事になります。
- ・加えて、入ロドアは常時開放し、一層の換気に務めております。
- ・手指消毒用のアルコールは、SHISEIDOの消毒液を使用しています。手に優しい保湿成分を配合しているとの事で、皆様にご好評を頂いております。
- ・日常清掃をより強化致します。
- ・お客様やスタッフが頻繁に手を触れる、エレベーターのボタン、テーブルと椅子、入ロドアとトイレの取っ手、筆・ペンなどのアルコール除菌を営業中にも定期的に行います。
- ・弊廊内が多くのお客様で混雑し、密になると判断すれば、弊廊への入場制限をお願いする場合もあります。
- ・弊廊スタッフはマスクを着用し、検温や体調管理、アルコールによる手指消毒を徹底して、接客に務めさせていただきます。
- ・令和3年3月末日、スタッフ全員のPCR検査(にしたんクリニック)を行い、全員、陰性でした。なお、今後も四季折々にPCR検査を実施してまいります。

コロナ禍の影響で、会期と営業時間の変更や、オンライン展示のみの可能性もございます。
お手間で恐縮ですが、弊廊ホームページや公式SNSにて、最新情報をご確認頂ければ助かります。



青木寿美子

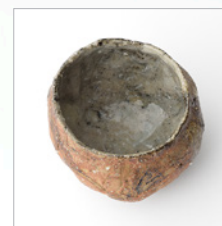
Aoki Sumiko

共感を探る試みを
ヤキモノを始めてから
旅の様に続けています。

愛知県名古屋生まれ
愛知県立芸術大学 美術研究科 大学院 陶磁科専攻 修了
平成 8 年 信楽にて作陶をはじめる
平成 11 年 信楽陶芸展 入選
平成 12 年 築窯
国際クラフト展伊丹 入選
平成 14 年 国際陶磁器展美濃 入選
平成 20 年 国際陶磁器展美濃 入選
平成 25 年 長三賞陶業展 長三金賞 (グランプリ)
平成 26 年 第 25 回 秀明文化基金賞

きせとの壺

W18.5×D18.5×H40.0cm



大西左朗

Onishi Satoki

粘土って、とても魅力有る存在
時には期待を大きく裏切る事もあるし 宝物を手にいれて喜んでる自分がいる時もある
どう扱って良いか悩み考えていると
闘争心が芽生えたり 新たなる道へと誘ってくれたり 突然の出会いもある
一期一会なんだと思う

昭和 39 年 滋賀県信楽町生まれ
昭和 63 年 東洋大学 社会学部 応用社会学科 卒業
平成 5 年 京都府立陶工高等技術専門学校 図案科 修了
平成 18 年 第 17 回 秀明文化基金賞
平成 19 年 現在形の陶芸 萩大賞展 (山口県立萩美術館)
平成 20 年 第 1 回 いまどき、しかりき、かやりき展 大賞
平成 25 年 信楽焼伝統工芸士 (総合部門) 認定
平成 30 年 第 11 回 現代茶陶展 入選
第 3 回 日本陶磁協会奨励賞 関西展 入選

信楽 捏ネズ茶盤 銘「新たなる」
W11.9×D11.3×H9.5cm



奥田陶生

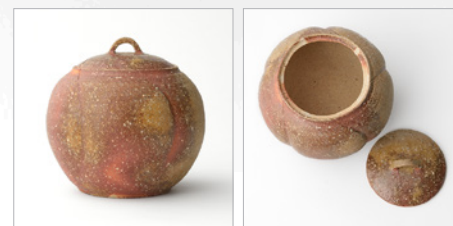
Okuda Sueo

一剣^じを持して起つ

昭和41年 滋賀県信楽町生まれ
昭和62年 京都府立陶工職業訓練校 成形科 修了
平成6年 ギャラリー陶園（信楽）個展
平成18年 ギャラリー陶園（信楽）個展
平成25年 ギャラリー陶園（信楽）個展
平成30年 ギャラリー悠（静岡）個展
令和元年 通のうつわ五人展（織部、名古屋）
第30回 秀明文化基金賞
令和2年 第30回 秀明文化基金賞 受賞記念展（ギャラリー陶園、信楽）
その他、関西各地でグループ展に出展

信楽茶碗

W17.0×D16.7×H6.5cm



神崎秀策

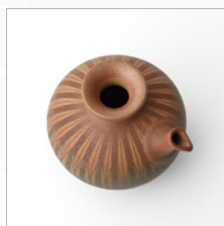
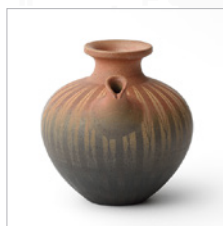
Kanzaki Shusaku

伝統を受け継ぎつつも古いものを目指さない。
時代に即した作品を。
信楽焼としてではなく、作家としての作品を。
現代の、そして未来に残る作品を生み出していきたい。

昭和58年 滋賀県信楽町生まれ
平成16年 京都府立 陶工高等技術専門校 修了
平成24年 第59回 日本伝統工芸展 入選
平成25年 第60回 日本伝統工芸展 入選
平成26年 第2回 陶美展 入選
平成27年 第44回 日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞、第62回 日本伝統工芸展 入選
平成28年 第27回 秀明文化基金賞
平成29年 第5回 陶美展 入選
平成30年 現代形の陶芸 萩大賞Ⅳ 入選、第65回 日本伝統工芸展 入選
第3回 日本陶磁協会奨励賞 関西展 入選
令和2年 第67回 日本伝統工芸展 入選
日本工芸会正会員

信楽水指

W20.0×D20.0×H17.5cm



小牧鉄平

Komaki Teppei

「古代想起」をテーマに
幾何学文様を焼締に写す。

昭和46年 茨城県生まれ
平成6年 京都精華大学 陶芸専攻科 卒業 信楽に移り製陶会社勤務
平成15年 高島屋京都美術工芸サロンにて個展（同、平成19年）
平成17年 信楽町多羅尾に移り独立 一基目の穴窯を築窯
平成18年 日本伝統工芸近畿展 入選 以降、入選12回
平成21年 第23回 萬古陶磁器コンペ準グランプリ
平成22年 第4回 現代茶陶展 入選
平成23年 二基目の半地下式穴窯を築窯
日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞、第22回 秀明文化基金賞
令和2年 陶美展 奨励賞 21 入選、第67回 日本伝統工芸展 入選

炭化幾何文注器
W11.5×D10.2×H10.5cm



迫能弘

Sako yoshihiro

信楽の白い土が、薪の炎をあび、窯からでてきたその色の变化に魅せられ、信楽の地に来ましたが、道中、能登半島で、珠洲焼に出会い、今では、信楽の窯とは別に、年に一度、穴窯での炭火焼成にもとりくんでいます。

昭和46年 奈良県桜井市三輪生まれ
平成4年 辻 清明氏に師事 やきものを志す
平成7年 石川県立九谷焼技術研究所 卒業 信楽にて修行
平成12年 信楽にて独立
平成21年 第56回 日本伝統工芸展 入選
平成22年 穴窯築窯
平成27年 第62回 日本伝統工芸展 入選
平成29年 台湾国立台南芸術大学にてワークショップ、第64回 日本伝統工芸展 入選
平成30年 第29回 秀明文化基金賞、第3回 日本陶磁協会奨励賞 関西展 奨励賞
令和2年 第67回 日本伝統工芸展 入選、日本工芸会 正会員 認定

炭化しのぎ茶碗
W14.5×D14.0×H8.5cm



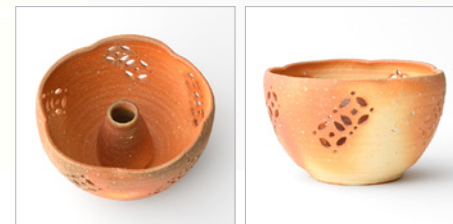
篠原 希

Shinohara Nozomu

信楽の白く長石を多く含む土の面白さ。
いったいどこまで焼くことができるのか。
そしてまだ見たこともない色がこの土なら出ると思っている。
この土の可能性の広がりに取り憑かれています。

昭和 47 年 大阪府生まれ
平成 3 年 信楽 古谷信男氏に師事
平成 10 年 信楽窯業技術試験場 釉薬科 修了
平成 11 年 信楽町黄瀬にて独立作陶
平成 16 年 伊賀に新たに穴窯を築く
平成 19 年 信楽焼伝統工芸士に認定される
平成 24 年 第 23 回 秀明文化基金賞
平成 26 年 講談社モーニング連載「へうげもの」破れ登場回での作画協力
平成 29 年 アメリカ ヘイスタック (MI) ベンランド (NC) での制作 (アメリカ) シーグローブ訪問 (NC)
令和 元年 Stanford University, Utah State University にて WS とトレインキルン窯焚きに参加
日本伝統工芸近畿展 入選など ほか各地でグループ展など多数

窯変壺
φ30.0×H34.0cm



高橋楽斎

Takahashi Rakusai

窯出しをしていると、時々、“これだ”という作品が、焼き上がります。
次の窯で、同じ様に焼きますが、旨くいきません。
しかしこの繰り返ししが、この仕事の面白さの一つと思っています。

昭和 29 年 滋賀県信楽町生まれ
昭和 50 年 滋賀県立信楽窯業試験場 卒業
昭和 52 年 荒川豊蔵先生のもとに互窯会結成
平成 4 年 柿傳ギャラリーにて個展 (9 回)
以降、日本橋三越本店、福岡三越、大阪高島屋、JR 名古屋高島屋、京都高島屋、山口井筒屋にて個展
平成 22 年 五代 高橋楽斎 襲名
令和 3 年 「信楽に生きる 高橋楽斎 高橋美子 田尾 晃 三人展」(柿傳ギャラリー)

七宝透鉢
W21.0×D20.0×H12.5cm



高間智子

Takama Tomoko

積み重なる記憶 薄れていく記憶

積み重なる感情 薄れていく感情

積み重ねては薄れ、想いは地層のように自分の中にカタチを残していく。
うつわに施された剥ぐように彫る装飾は言いようのない衝動と感情に繋っていく。

平成 17 年 大阪芸術大学大学院 芸術制作研究科 修士課程造形表現 修了
平成 19 年 京都高島屋 6 階工芸サロンにて個展（平成 26 年、29 年、令和 2 年）
平成 23 年 滋賀県立陶芸の森スタジオアーティスト、大阪高島屋 6 階 NEXT ギャラリー（平成 25 年）
平成 25 年 新時代の「やきもの」への挑戦！あれもやきものこれもやきもの（滋賀県立陶芸の森）
平成 26 年 日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞、第 25 回 秀明文化基金賞
平成 29 年 アートフェア東京 2017（東京国際フォーラム）、華やきの陶（銀座和光ホール）
平成 30 年 第 3 回 日本陶磁協会奨励賞 関西展 入選
その他個展、企画展多数

積層彩磁—花器—
W19.5×D19.5×H22.0cm



谷 穹

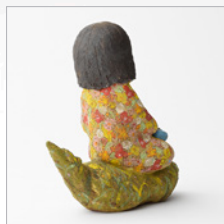
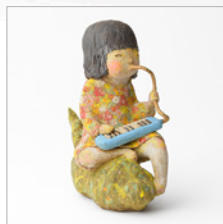
TANI Q

「おいしそう！」って思う感覚に華飾はない
長い長い旅において大きな指標のひとつになる
手のなかのそれは未来への乗り物かのようにだ
信楽の「意識」を新たに構築するために
マッサージをしよう

昭和 52 年 滋賀県信楽 谷清右衛門窯に生まれる
平成 19 年 中世信楽に多く見られる双胴式穴窯を築窯
平成 24 年 単室式穴窯築窯
平成 26 年 信楽大壺がポートランド美術館（アメリカ）に収蔵される
平成 27 年 「ローローロ」未来の途中プロジェクトの一環としてギャラリー@KCUA（京都）個展
平成 29 年 「これからの、未来の途中—美術・工芸・デザインの新鋭 11 人展」
京都工芸繊維大学 美術工芸資料館

令和 元年 「Air」NOTA_SHOP（滋賀）、「火色」甞粹（京都）
令和 2 年 「健在する日本の陶芸—不如意の先へ—」益子陶芸美術館（栃木）
令和 3 年 「No Man's Land—陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先—」兵庫陶芸美術館（兵庫）

信楽 蹲
W18.8×D18.8×H18.8cm



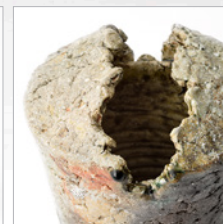
津守愛香

Tsumori Aiko

今はピアノを鍵盤ハーモニカとよぶらしいです。
天上の音楽。

昭和54年 滋賀県生まれ
平成14年 京都市立芸術大学 卒業
朝日陶芸展 入選 (以後、平成15、17、18年)
平成15年 女流陶芸展 新人賞
平成19年 長三賞陶芸ビエンナーレ 奨励賞
平成23年 滋賀県立陶芸の森 陶芸館ギャラリー「津守愛香-ちょっとシニカルでゆかいな仲間たち」
平成27年 第6回 菊池ビエンナーレ 優秀賞
平成29年 平成28年度平和堂財団芸術奨励賞、第28回 秀明文化基金賞、第7回 菊池ビエンナーレ 優秀賞
平成30年 第43回 滋賀県文化奨励賞

ピアノ飛天
W29.0×D14.0×H26.0cm



古谷和也

Furutani Kazuya

土・炎という自然の力を借り、いかに自分を表現するか。
生まれ育った信楽の地で、日々自問自答しながら自分の作品をつくる。
そんな日常も自分も自然の一部だと感じてきた。

昭和51年 滋賀県信楽町生まれ
平成10年 京都府立陶工技術専門学校 卒業 父、古谷道生に師事
平成14年 穴窯築窯
平成15年 日本伝統工芸近畿展 入選 (以降10回入選)
池袋東武百貨店にて初個展 (以降隔年個展)
平成21年 阿曾美術にて個展 (以降隔年個展)
平成25年 名古屋栄三越にて個展 (以降隔年個展)
平成26年 大阪高島屋にて個展 (以降隔年個展)
平成27年 第26回 秀明文化基金賞
令和元年 日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞

信楽混成花入
φ17.8×H26.8cm

価格表

作家名		作品名		本体価格/円 (税込価格/円)	作品サイズ (cm)
1	青木寿美子	きせとの壺 [箱無し]	P6	170,000 (187,000)	W18.5×D18.5×H40.0
2	大西左朗	信楽 捏ネズ茶盤 銘「新たなる」 [桐箱付・後日]	P7	70,000 (77,000)	W11.9×D11.3×H9.5
3	奥田陶生	信楽茶碗 [桐箱付・後日]	P8	90,000 (99,000)	W17.0×D16.7×H6.5
4	神崎秀策	信楽水指 [桐箱付・後日]	P9	50,000 (55,000)	W20.0×D20.0×H17.5
5	小牧鉄平	炭化幾何文注器 [桐箱付・後日]	P10	24,000 (26,400)	W11.5×D10.2×H10.5
6	迫 能弘	炭化しのぎ茶碗 [桐箱付・後日]	P11	50,000 (55,000)	W14.5×D14.0×H8.5
7	篠原 希	窯変壺 [桐箱付・後日]	P12	160,000 (176,000)	φ 30.0×H34.0
8	高橋楽斎	七宝透鉢 [桐箱付・後日]	P13	150,000 (165,000)	W21.0×D20.0×H12.5
9	高間智子	積層彩磁—花器— [桐箱付・後日]	P14	120,000 (132,000)	W19.5×D19.5×H22.0
10	谷 穹	信楽 蹲 [桐箱付・後日]	P15	150,000 (165,000)	W18.8×D18.8×H18.8
11	津守愛香	ピアニカ飛天 [箱無し]	P16	170,000 (187,000)	W29.0×D14.0×H26.0
12	古谷和也	信楽混成花入 [桐箱付・後日]	P17	130,000 (143,000)	φ 17.8×H26.8

過去の「信楽 一土の賦 十二人展」



信楽 一土の賦 十二人展—
平成 31 年 3 月 15 日 (金) ~ 21 日 (木)



新宿で大人の道草を。

柿付ギャラー
KAKIDEN GALLERY



160-0022

東京都新宿区新宿3-37-11

柿ダヤナリ

KAKI DENE GALLERY